

リセットされつつける酒場の時間

なかた しおん
中田 梓音
総合研究大学院大学
文化科学研究科後期博士課程

酒場というフィールド
酒場、と聞いて何を思い浮かべるだろうか。酒、グラス、タバコの煙、あるいは歌声かもしれない。わたしが酒場をフィールドにして四、五年が経つ。酒場といっても居酒屋、スナック、クラブなど多種多様であり、そこに集う客もさまざま。今でこそ女性客もごく当たり前であるが、それでもやはり朝から満員電車出勤し、分刻みのスケジュールをこなしながら夜まで働いて家計を支える男性サラリーマンの癒しの場として機能している酒場は多い。



さまざまな酒場の集まる裏通り

をもち、接客者と客の会話の収集を目的に酒場をめぐっていた。現場での観察を続けるうちに、会話以外にも客をもてなすサービスが多様になり、それが後々、売り上げに影響することに気づいた。自分で買って家で飲むよりも高くつくお会計であっても、サービス料が含まれたその金額が妥当だと客に思わせるようなもてなしが酒場には必要であり、そのもてなしが上手い店は常連客をつかめる。というわけで、最近ではそこで交わされる会話だけでなく酒場のもてなしにも注目しつつ酒場調査を続けている。

酒場に入ると、まず客におしほりが手渡される。海外の酒場を訪れる機会もあるが、それらと比較しても、日本の酒場の特徴というところまでいけば、おしほりが思い浮かぶ。夏は冷たく、冬は温かく、おしほりで顔をふいてさっぱりと幸せそうなサラリーマンたちを見ると、一瞬、「男に生まれてよかったかな」と思ったりもする。

水に浸した布の水を切るときにしぼる、という行為がおしほりの語源で、由来は平安時代である。口にくわえた瞬間にタバコに火をつけるという早技を披露する。そして店にもよるが、だいたい灰皿に吸殻が二本溜まると新しい灰皿と交換される。客は自宅や会社のように、溜まっていく吸殻の山を目にすることはないのである。

時間が経つのを忘れるほどに……

さて、ここが一番のポイントであるが、このようなお店には壁掛け時計がない。接客してくれる女性接客者も誰一人として腕時計をつけていないのである。フィールドのママさんいわく、「時間を感ぜさせないため」だという。良いか悪いかの議論は別にして、少なくとも接客する方が時計をチラッと見ることで客に「早く帰って欲しいのかな」と思わせてしまう誤解は防げる。時間を確認したければ自分の腕時計か、携帯電話を見るしかない客

酒のあるところにタバコあり。最近では分煙にしている酒場も多いが、女性接客者が接客をしてくれる酒場では分煙・禁煙は見たことがない。そもそも客がタバコを吸うという前提で女性接客者はライターを常備している。客がタバコを手取るのを横目で確認すると、談笑しながらライターを握りしめ、客が一本



時計のあるべき場所にはカラオケの画面が



酒場の3点セット(?) おしほり・灰皿・水割り

代にさかのほり、家に訪れた客に渡された濡れた布が始まりといわれている。今では飛行機の国際線や海外の高級レストランなどにも普及した日本発祥の誇るべき「濡れた布」文化であり、客に対して渡すおしほりは、もてなしの心をあらわしていることにもなる。

酒場のもてなしアイテム

おしほりはもてなしの心と述べたが、女性が接客をしてくれる酒場では、おつまみで手が汚れると新しいおしほり、トイレから帰ってくるとまた新しいおしほり、というようにあるが、そうすると女性接客者に「なによ、時間ばかり気にして。約束でもあるの?」とやられてしまう。かくして、客は時計の見えない時間のながれに身を任せることになる。

これまで見てきた酒場のもてなしは、この、時計・時間のからくりにとどり着く。おしほりを頻繁に交換するのも、グラスのなかの水割りをつぎ足すのも、灰皿を入れ替えるのも、つまりは時間の経過の産物を取り消し、時計の針を三〇分〜一時間前に戻す行為ではないか。このリセット効果（とよばせてもらう）によって、客は時間を忘れて楽しく遊べるのかもしれない。

よくよく考えてみれば、「何時何分の電車」、「人との約束はどこで何時」、「スーパリーの閉店は何時」というような現実の生活は、時計なしでは行動不可能であり、逆に時計が視界に入ることによって次にするべきことを思い出すとということもよくあることだ。

このような現実時間を思い出させる時計をあまり設置せずに非現実的空間を演出する某テーマパークのような要素が、酒場にも存在している。それも時間を忘れさせるだけでなく、タイムマシンで過去にさかのぼったかのような錯覚にさえ陥る。しかしそのあいだにも、現実には時間はしっかりと経過しており、ボトルのお酒も確実に減っているのである。